

松反り まつ かへ しひてあれやは

三栗の みつぐり 中上り来ぬ なかのほ 麻呂といふ奴 まろ やつこ

妻(巻九・一七八三)

席などで披露する座興の歌として作られたのではないでしょうか。

なお、『万葉集』本文の漢字表記では、この歌は「松反四臂而有八羽三栗中上不来麻呂等言八子」と記されま

す。「四臂」は「有八羽」

「三栗」「八子」と、いくつもの数字を織り

込むのが特徴で、こうした表記からも戯歌としての巧みさを読みと

ることができま

す。(泉立万葉文化館主任 研究員・竹内亮)

この歌は、麻呂とい

う名の男性が妻に対し

て詠んだ歌「雪こそは

春日消ゆらめ心さへ消

え失せたれや言も通は

ぬ(雪ならば春の日さ

しに溶けて消えるでし

ようが、あなたは心ま

で消え失せてしまった

のか、音沙汰もありま

せんね)」「(巻九・一

七八三)に對する、妻

から夫の麻呂への返歌

です。これらの2首は

もともと柿本人麻呂歌

集に収められており、

『万葉集』は同歌集か

らこの一對の贈答歌を

引用しています。

歌の内容は、冬が過

ぎ春になっても便りを

寄越さない妻への苦言

を呈した夫に対し、身

体に何の不都合も無い

にも関わらず中上り

(任期途中での上京を

やまと
万葉がたり



して来ない夫の不義理

を妻がなじったもので

す。このやりとりから、

夫の麻呂は地方官とし

て赴任しており、妻は

都に残っていたことが

わかります。「松反り」

(「しひ」にかかる)、「三

栗の(「中」にかかる)

と枕詞を二つも用い、

常縁の「松」で心変わり

せず家で待つ妻の心

情「反り」で帰ってこ

ない夫の態度を表現す

るなど、高度に技巧が

凝らされた歌と評価で

きます。

夫の麻呂について

は、柿本人麻呂歌集か

ら転載された他の歌

(巻九・一七二五)の

作者としても見えるこ

となどから、実在の柿

呂と推定され

る

本人麻呂を指すとみる

意見があります。しか

し、麻呂は現代で言う

と「太郎」のような一

般的な男性の名前であ

り、歌の表現の上手さ

から見ても、戯歌の中

で仮構された架空の人

物と考える方がよいで

しょう。おそらくは宴

歌

の

【訳】体が役立たずになつたのだからか、いやそうではあるまいに、中上りして来ない、麻呂という奴めは。